

# ちょっと読んでみませんか（平成三十年秋季彼岸）

## 第47話『涌き出る救世主』 （本源寺副住職 本間健司）

今年の夏から、そして秋の初めにかけて、自然災害が連続して発生しました。

水の恐さをあらためて実感させられた西日本の豪雨大水害連日の“命に危険が及ぶ”猛暑

迷走する列島“逆”横断台風

“日常的”になってしまったゲリラ豪雨・雷雨

関西空港を孤立・麻痺させた最強台風、そして、

広範囲な山崩れの映像に誰もが目を疑った北海道東部地震…

ずっと頭に思い浮かぶだけでも、これだけ多くの、そして大規模な自然災害が発生しました。そして、今現在も尚、復旧作業が続いている災害も数多くあります。

先日行われました次期総理大臣の立候補演説でも「防災省の創設」ということが大きな論点になっていましたが、これからの日本において、「防災」や「救助・復旧」活動に関わる今までの“体制”を大きく改めて行かなければならないことは、日本国民の誰もが深く実感していることだと思います。

一方、私は、西日本水害の救助活動を映し出すテレビ映像を見ていて、その、「防災」の“体制”よりも、もっと根本的な不安をふと抱いてしまったのです。

それは、これから将来、労働者人口や若年人口が急激に減少していく日本社会において、自衛隊や消防隊などの、災害時に救助活動を担う人たちの数も同じように減少していくのではないか、ということなのです。

救助・復旧活動に携わる人が少なくなれば、当然のことながら、救助されるまでの時間が長くなり、被害が拡大する可能性が高くなります。また、復旧活動にも、現在よりも多くの期間を要するようになるでしょう。

しかも、今年のように、災害の数や規模は逆に拡大していく可能性が高いのです。

皆さんは、どのように感じられますか？

さて、その西日本水害のニュースを観ていて、一つ、救いとなる映像を目にしました。

それは、ジェットスキーに乗った一人の青年が、水に覆われた町の中で、家の二階や屋根で救助を待つ人たちを、少しずつ後部座席に乗せ、町中を何度もまわり、救助を続けたというニュースです。

この青年は、被害が大きいその町に以前住んでいたことがあり、「ただ黙って見ていただけでは申し訳ない。自分にも何か出来ることはないだろうか？」。そう考えた時に、趣味でやっていたジェットスキーの事を思い出し、微力ながらもやってみようと、思い切って行動に移したとのことでした。

その、ジェットスキーで颯爽と走りながら救助する姿が、さながら“ふい(不意)に涌き出た救世主”のようでカッコ良く、ニュースでも取り上げられたのでしょう。

さて、私たちが読むお経『ほけきょう みょうほうれんげきょう法華経(妙法蓮華経)』の中にも、「地面から不意に涌き出た菩薩」(略して、「地涌(じゆ)の菩薩」と呼ばれます)のことが説かれます。それは、次のような話の展開になっています。

永遠の真理である『妙法蓮華経』という教えを説かれたお釈迦様は、自らが滅した後に、引き継いでこの『妙法蓮華経』を広めてくれる修行者を探していました。しかし、この世界には、将来必ず非常に乱れた時代が訪れることを、お釈迦様が予言されたため、多くの弟子たちは、教えを説き広めることに二の足を踏みます。

そんな中、地球以外の遠い世界から修行に来ていた多くの菩薩たちが、「自分たちが代わってこの世界で教えを説き広めましょう」と提案するのです。

ところが、お釈迦様は、その菩薩たちの提案を断り、こう述べられたのです。

「いえいえ、ご心配には及びません。実は、今まで姿を現しませんでした。この地球の地下世界においては、はるか昔から地道に精進を重ね、自らが行動に出る時期をじつと待っていた数多くの多様な修行者が存在するのです」と。

その瞬間、突然、大地に大きな亀裂ができ、その間から、尊い金色の姿をした数えきれない菩薩(修行者)たちが、一気に地上へと涌き出て、その姿を現したのです。その菩薩たちの中には、多くの弟子を率いている者もいれば、全く一人で静かに現れる者もいて、その性格は実に多彩でありました。

地上に涌き出した多くの菩薩たちは、釈迦・多宝如来の御前において最高の礼をなした後、次のように申し上げるのです。

「この地球上の人々を導くのは大変ではなかったですか？ お疲れではないですか？」と。(この続きは別の機会に…)

いかがでしょうか。

先ほど取り上げました、ジェットスキーの青年。彼も、お釈迦様が説かれた「地面から湧き出た菩薩」の一人のような気が、私はしてしまうのです。

いえ、それどころか、彼だけでなく私たち一人一人がみんな「地涌(じゆ)の菩薩」の可能性を秘めているということこそが、お釈迦様の教え・導きなのだと思います。

お釈迦様の予言された通り、困難を抱えた時代が訪れている今こそ、あの青年のように目立つことでなくても、一人一人が、小さな地味なことでも自分にも出来ることを見つめ直し、「微力ながらもやってみよう」と思い立ち行動に移していくことが必要になってくるのだと思います。

自分自身も、多彩・多様な「地涌(じゆ)の菩薩」の一員なんだと思うと、日常の全てが「地道な精進」のような気がしてきませんか。

合掌 南無妙法蓮華經